



8カンテレ

CSR REPORT 2020

関西テレビ放送 CSR報告書2020

目次

CSR活動の基本方針 / CSR活動 3つの柱 01
トップメッセージ「新しいCSR活動の可能性」 代表取締役社長 羽牟正一 02
心でつながるプロジェクト 03

1 地域への貢献活動

『報道ランナー』いま求められる私たちの役割って..... 04
阪神淡路大震災25年追悼番組『この瞬間(とき)に祈る』..... 06
防災特番『報道ランナー防災SP その時、あなたは逃げますか?』..... 07
東京オリンピック代表選考会『第39回大阪国際女子マラソン』 08
カンテレアナウンサー朗読会 vol.18「おはなしの暖炉」..... 09
舞台「大阪環状線」..... 09
「災害から命を守るためにテレビの気象解説ができること」片平 敦 10

2 子どもたちの未来のために

たまご&ひよこDAY 12
だいすけお兄さんの世界迷作劇場..... 13
里親シンポジウム / 児童虐待防止キャンペーン..... 14
FNSチャリティキャンペーン / 関西テレビ青少年育成事業団 15

CSR スペシャルレポート

「CiRA×カンテレ 京都大学iPS細胞研究基金講演会」山中伸弥 16

3 人権を守る

ザ・ドキュメント『人生被害～あるハンセン病家族の歳月～』..... 18
ドラマ『パーフェクトワールド』..... 19
子ども×人権 テレビドキュメンタリーを通して人権を考える 20
ともいき 第17回共に生きる障がい者展 20
野球の生中継で解説放送に挑戦! 21
関西テレビ番組審議会「番組は言語でつくられる」 22
オンブズ・カンテレ委員会『「胸いっぱいサミット!」への意見』..... 23
『胸いっぱいサミット!』放送からBPO意見通知を受けるまで..... 24
メディアと人権と表現の自由を考える研修 25

4 CSR推進活動

『カンテレ通信』に寄せて..... 26
自社検証番組『カンテレ通信』/ その他の取り組み 27
映像制作支援・学びアイ 28
出前授業 / 社内見学 29
CSR活動 月次カレンダー 30

放送を続けるために 31
おわりに 31
会社概要 / グループ会社 / 関西テレビ視聴可能エリア 32

CSR活動の基本方針

関西テレビは子どもたちの健やかな成長を応援するため、ニュース番組を通じて児童虐待防止キャンペーンを展開するとともに、「児童虐待防止協会」の設立に協力し、現在も支援を続けています。また、ユニセフと協力して世界の子どもたちを支援する「FNSチャリティキャンペーン」の実施や、キャンプ体験を通じて青少年の健全な育成をめざす「関西テレビ青少年育成事業団」の設立など、さまざまな社会貢献活動を続けてきました。

しかし、2007年に番組捏造問題*をひき起こし、これを機に私たちは「関西テレビ倫理・行動憲章」を定めました。憲章では「公共の福祉と文化の向上、社会正義の実現を通じて健全な民主主義の発展に寄与する」と再確認しました。

さらに「放送の公共的使命を深く自覚し、国民の知る権利に奉仕するため、また視聴者の楽しみと満足のために、報道・表現の自由を行使すること」「人間の尊厳に敬意を払い、差別を行わず、人権を守ること」を誓いました。これに則って地域情報・災害情報・エンターテインメント番組を日々エリアの人たちに届けています。

同時に私たちは「企業市民としての社会的責任として放送・イベントなど事業を通じて社会全般に対する貢献活動を行い、社会問題の解決に自発的に取り組む」と約束しました。その実践として社内横断の「心でつながる」プロジェクトチームを立ち上げ、視聴者との相互理解を通してメディアリテラシーの向上や地域貢献活動に努めてきました。

その歴史的経緯を踏まえ、CSRの活動方針を以下の3つとします。

CSR活動 3つの柱

地域への
貢献活動

地域に愛されるテレビ局として地域の情報を発信し、文化や歴史を守り、環境を大切に、地域と地域、人と人をつなぎます。

子どもたちの
未来のために

子どもは未来そのものです。子どもたちを社会全体で見守り、次の時代を担う世代として大切に育てる。そんな活動をサポートしていきます。

人権を守る

基本的人権を守るために報道・言論の自由が付託されていることを自覚し、社会的弱者に寄り添い、誰もが幸せに生きやすい社会をめざします。

*2007年1月7日に放送された『発掘!あるある大事典II』で番組内容のデータやコメントが捏造された問題

トップメッセージ

新しいCSR活動の可能性

私たち関西テレビの原点は放送です。開局以来、ニュース、ドキュメンタリー、ドラマ、バラエティー、あるいはスポーツ中継などを視聴者の皆さまにお届けしてきました。そしてこれらの番組は、人々にとって欠かせないものになり、生活の豊かさに貢献してきました。

また、関西テレビは「地域への貢献活動」「子どもたちの未来のために」「人権を守る」をCSR活動の3つの柱とし、メディア企業としての社会的責任を果たすべく、本業の放送と並ぶかたちで社会貢献やメディアリテラシーなど多岐にわたる活動を続けてきました。

そして今、テレビを取り巻く環境は大きく変化しています。地上波放送だけでなく、インターネットの革新的な発達でさまざまな出口が存在し、いろいろなチャンネルで関西はもちろん、世界中にコミュニケーションできるようになりました。これから放送はもちろんのことCSR活動にも新しい変化が生まれてきます。

関西では2025年に「大阪・関西万博」が開催されます。この「大阪・関西万博」のテーマのひとつに国連が採択したSDGs(持続可能な開発目標)があります。SDGsに定められた持続可能な世界を実現する17のゴールを達成するため、そしてそこから、地球上の誰一人として取り残さないため、関西テレビでは「すべての業務にはSDGsに結びつく要素がある」と考え、SDGs実現のため社会課題の解決への取り組みを強化していきます。

関西の特色ある文化や地域の話、可能性にアンテナを張って、時代を先取りし、今までと違った新しい形での社会貢献や地域貢献ができればと思います。

関西テレビはこれからも、本業である放送とCSR活動を両輪に、社会や地域に貢献し続ける企業としてチャレンジしていきます。

関西テレビ放送株式会社
代表取締役社長
羽牟正一



CSR活動を担う社内横断的組織

心でつながるプロジェクト



関西テレビのメディアリテラシー活動で重要な役割を果たしているのが、各部局の社員がメンバーとなる「心でつながる」プロジェクトチームです。メディアリテラシーをテーマに文字通り視聴者と心でつながる活動を企画してきました。月1回の会議を軸に“ボトムアップ型”の活動を展開しています。

『発掘!あるある大事典II』問題を機に視聴者からの信頼を回復し、視聴者と心でつながることを目的に、2007年に立ち上げたのが「心でつながる」プロジェクトチーム(以下、心PJ)です。

視聴者側の情報を受け止める力(メディアリテラシー)と私たち送り手側の伝達能力の向上に資する活動を行う組織です。以来、視聴者と心でつながるために「オープンスクール」などさまざまなイベントを実施し「出前授業」や「映像制作支援・学びアイ」など今に続くものも少なくありません。

2019年5月には、防災・減災をテーマにしたイベント「防災@カンテレ 片平さんとみんなで学ぼう!防災の知恵」を本社1階のなんでもアリーナ、インタラクティブエリアで開催しました。近年、全国各地が豪雨や台風、大地震に見舞われ、大きな被害が出ていることから、「防災力」を高めることを目的に、『報道ランナー』でおなじみの気象予報士・防災士の片平 敦さんが、テレビ



「心PJ」会議

の防災情報の活用方法など“防災リテラシー”についての授業を行いました。そしてこの防災イベントは、日本民間放送



「防災@カンテレ」

連盟の「2019年度民放連メディアリテラシー活動助成事業」のひとつに選ばれました。

「防災力」を高めるには何よりも、防災・減災学習と訓練を継続していくことが大切です。心PJでは、この防災イベントを2020年も継続して実施することを決めました。しかし残念ながら、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止になりました。

心PJは、視聴者の信頼にこたえ、メディアリテラシーをテーマに、放送・イベントなどを通じて社会と地域に貢献する取り組みを続けていきます。



詳細はコチラ

CSR推進局
放送文化推進部
石田善久



2019年度メンバー(6月～)

大場英幸取締役(3月～プロジェクトマネジャー) / 前田ひとみ(3月～プロジェクトリーダー) / 木村昭仁(経営戦略部) / 池尾 徳(視聴者情報部)
池畑祐一(グループ経営推進部) / 山田 智(人事部) / 山村 愛(～2月 労政部) / 松本菜莉沙(3月～ 総務部) / 大岸真哉(業務部)
村谷 嶺(～12月 コンテンツ事業部) / 藤井大輝(1月～ コンテンツ事業部) / 古谷 陽(事業部) / 乾 充貴(編成部) / 伊藤万里子(宣伝部)
杉本なつみ(アナウンス部) / 細川康雄(～11月 制作部) / 相馬芳匡(12月～ 制作部) / 大石竜也(美術部) / 文倉大志(報道センター)
栗村文彦(報道映像部) / 山田恭弘(スポーツ部) / 松尾成泰(制作技術センター) / 青木 満(制作技術センター) / 宮島祥晃(ITソリューション部)

オブザーバー：石巻ゆうすけ(関西テレビ青少年育成事業団)

事務局：CSR推進局放送文化推進部



R 報道ランナー

いま求められる私たちの役割って・・・

キャスター 新実彰平

「日々何を思い番組に取り組んでいるのかを綴ってほしい」。このたびそう寄稿の依頼を頂戴し真っ先に思い出したのは、番組スタートを目前に控えた3年前の私の心の内でした。9割が不安や恐怖といった感情の中、なぜか残りの1割で明確に描いていたのは番組やキャスターについての理想像。それが今なお私の指針であり続けているのです。

それは「現場の声に耳を傾け時には自らも現場に赴き、そこにある真実、背景を、自らの言葉で語る。結論を一刀両断に述べず、さまざまな事実や意見、背景を淡々と列挙し、判断は視聴者に委ねる」というもの。

しかし、そのまま私の日々の信念を語っても意味がないような気がしてしまいました。あれから3年が経ち自らとこの番組のこれからに迷いを感じることも増えてきています。自分たちは一体、社会に何をもたらせているのだろう。そんなことを考えることも、しばしばです。そんな折のこの機会でしたので当初は全く筆が進みませんでした。でもせっかくなら改めて、自分の思いの「目的」や、今感じている不安、新たな問題意識も含め言語化してみようと試みたものです。どうかお付き合いください。



R 民主主義社会の歯車として

まず先ほどの私の理想が、何をめざすためのものなのかですが、どうやら「健全な民主主義の実現」のようです。

国民はわれわれメディアの伝える情報を判断材料にして、闊達な議論を行い、自己の行動を決定します。そしてひいては、種々の選挙における投票行動につなげ、それが国、地域の行く末に反映されます。つまり民主主義制度の下、国民の投票行動を通じて国の将来が決まってゆく、そのプロセスの大本のよりどころは、われわれメディアの伝える「情報」なのです。

国民の選択の結果は何より尊重されるべきですが、その選択は事実に基づいて主体的になされるべきです。ですからわれわれがその結果を誘導することはあってはならず、国民の主体的な選択が少しでも多くの、そして多様な、事実と意見に基づいてなされるよう努めること、つまり「究極に健全に民主主義を機能させること」がわれわれにとっての最大にして最高の社会貢献なのではないかと考えているのです。

R 若者にとっては・・・

しかし私が報道番組を通じて社会に貢献できているという実感を持っていないのには理由があります。今の時代、多くの若者にとってテレビが意思決定のための材料でなくなってきているのを肌で感じるからです。言うまでもなくテレビに取って代わりつつあるのはインターネット。ネット情報は玉石混交ですからテレビに信頼感という面において優位性がないわけではないのですが、これまで以上に情報の「正しさ」を追求し、かつ膨大な情報を端的にわかりやすくお伝えすることはわれわれにとって大きな課題です。

さらに、これまで権力の監視や批判を重要な役割として担ってきたテレビ報道は、むしろ世論を誤った方向に導く「権力」として国民に認識され



始めています。そして、「批判」だけで高齢者を中心に視聴を得てそれを業としている媒体だと認識している若者もいます。私自身も12年前は、時の総理の誤読を連日報道しエンターテインメント化するテレビに辟易し、「勉強してから来い!」と記者を一喝する大阪府知事に胸のすく思いを覚えていた視聴者でした。

R 未来に向けて

これからのテレビ報道に必要なのは「批判より提案」だと考えます。社会課題を提示して終わりではなく、実際に解決されるまでとことん報じ続ける信念と、どうすれば解決できるのかの提案。これは決して容易ではありません。課題は長い歴史の帰結として今生じているわけですし、時の行政や政治がそれなりに悩んで取り組んだ上で解決できていないわけですから。しかし、われわれがとりわけ身近な関西の課題と真剣に向き合い、実際に世の中のあり方を変えられるような存在であれたのなら、健全な民主主義を実現するための歯車を超えて、より良い社会を作るための重要なプレーヤーとして、これからも社会に必要とされ得るのではないのでしょうか。

そんなふうに悲観的に、しかし前向きに、日々のニュースに臨んでいます。



詳細はコチラ

阪神淡路大震災25年追悼番組
『この瞬間(とき)に祈る』



毎年やり続ける意味

1月17日は毎年やって来ます。関西の報道機関は、それぞれが試行錯誤を重ねて四半世紀の間、阪神淡路大震災を伝えています。関西テレビも、12月後半から日々のニュース番組で特集を組んだほか、命を守るために必要な防災を考える特別番組も続けています。「四半世紀・25年」という時間をどう捉えるか。

今もあの日、家族や暮らしを失った人たちが、その記憶とともに生きている一方で、震災をそもそも体験していない、知らない世代がいるというなかで、「あの日何があったのか」を伝えることの重要性も高まっていると考えています。それをいかにわかりやすく、そして自分事として捉えてもらうように伝えるかを日々悩みながら取材・放送を続けています。そのなかで、1996年から続いている特別番組が、『この瞬間(とき)に祈る』です。地震発生時刻である1月17日午前5時46分に行われる追悼を生中継で伝える番組です。今年も、『報道ランナー』での取材に加え、この番組のための取材も行ったうえで、神戸・三宮の東遊園地と、火災で甚大な被害が出た長田区



追悼式典会場から中継する新実彰平アナウンサー(神戸・東遊園地)

鷹取地区、この二つの追悼式典会場からの二元中継で放送しました。この二つの中継は、発災直後からずっと被災地を取材しているベテランカメラマンとともに、当時小学生で関西に住んでいなかった記者や現在25歳の記者も担当しました。

時間が経ち、「風化」も指摘されています。そもそも「経験したことがない」世代が増えることは避けられません。ですが、それでも、この時間には多くの人、それも若い世代も含めて追悼の場に集まり祈りを捧げている。このことは伝え続けたいといけません。また、時間の流れとともに、かつて早朝の式典に参加できていた人でも、高齢になったり、遠方に移り住んだり、さまざまな事情で行けなくなる人も増えています。家にいる人にも一緒に祈りを捧げる時間を届けたい、そういう思いも込めています。

時間が流れるがゆえに続けなくてはいけないことがある。そういうことを特に強く感じた番組制作でした。



報道局報道センター
奥 元伸



追悼番組中継現場



防災特番
『報道ランナー防災SP その時、あなたは逃げますか?』



防災情報の“バトン”どうつなぐのか?

報道局では、阪神淡路大震災から8年経った2003年から、これまでの被災者や被災地を取材してきた番組に加え、次の災害に備える「防災」特番を始めました。

2020年の防災特番は『その時、あなたは逃げますか?』というタイトルで、頻発している豪雨災害からどう避難するかを取り上げました。『報道ランナー』の特番なのでランナーが持つバトンに掛けて「つなげ防災情報のバトン」というサブタイトルを付けました。行政から発せられる避難情報をバトンに見立て、その「受け渡し」がうまくいっていない現状の問題点を洗い出しました。その中で、われわれ報道機関の情報発信のあり方にも自戒を込めて切り込み、来ることがわかっている台風や豪雨について「事前報道」はどうあるべきかについても議論しました。番組の呼びかけで、災害を自身に降りかかる“自分事”として捉えてもらい、実際に避難行動につなげて



もらう。報道によって「視聴者の命を救いたい」というわれわれの願いを伝えようと試みました。この願いをのせたバトンを少しでもうまく受け渡せるような番組作りを今後も続けていきたいと考えています。



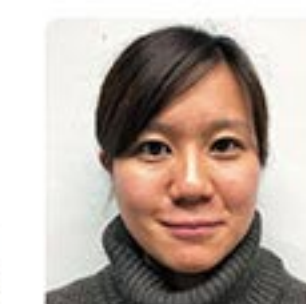
報道局報道センター
神崎 博

被災した方から受け取った“バトン” 次の防災につなげたい

災害取材では、被災された地元の方の話をしっかり聞くことを意識しています。それぞれのお話の中に、生死を分ける判断や瞬間があったことがわかります。その時代の、その災害ならではの新たな課題が見えてくるという経験もしました。気象庁が「特別警報」の制度を導入して数年が経ちますが、2019年の台風

19号では、被災者への取材から「特別警報解除“後”の河川決壊」が多くの人々の命を奪ったことがわかりました。これは国としても、今後の大きな教訓となりました。

誰かが悲しい思いをした教訓が生かされずに、次の災害で命を落とすことほど悲しいことはありません。報道することによって災害に立ち向かう気持ちを持つ方が一人でも増えたら…そんな思いをもって日々取材に挑んでいます。



報道局報道センター
押川真理

東京オリンピック代表選考会 『第39回大阪国際女子マラソン』



4年に一度、いや一生に一度。大阪からTOKYOへ――

今年で39回を数える「大阪国際女子マラソン」。4年に一度行われるオリンピックの開催年には日本代表選考会となり、日本中から大きな注目を浴びます。特に今回は東京オリンピックの代表選考という、一生一度の大舞台となりました。レースはダイハツの松田瑞生選手(24)が選考基準タイムを上回る素晴らしい記録



松田瑞生選手

で優勝、東京五輪への夢をつなぎました。そんな中で印象的だったのは、沿道からの声援。松田瑞生選手が大阪出身と

いうこともあって「松田、がんばれー!」など例年以上にたくさんの人々が沿道に出て声をかけていました。実は松田選手が大阪国際を走ることに決めた裏には「この声援を浴びたい」という理由がありました。松田選手曰く「ちょっとガラが悪いけど、家族みたい」な、大阪らしい温かい応援。沿道の応援が選手にとってどれほど支えになるか、中継の中でも映像と音声で最大限伝えられるように意識しました。残念ながら東京五輪は補欠となってしまった松田選手ですが、いつの日か、またあの声援の中に帰ってきてくれることをスタッフ全員で願っています。

スポーツ局スポーツ部
片山健太



進化するマラソン中継

全国的にも珍しいのですが、関西テレビの1号移動車には数年前からスローVTRを搭載しています。昨年富士加代子選手が転倒したシーンもこのシステムで迅速に放送することができました。「移動車のVTRは音も再生できるのですか?」という質問が飛び出したのは本番前日夜の最終打ち合わせでした。そこから移動車のスタッフは音も再生できるようにシステムを組み換えたのです。「ごめん、やめるわ...」レース中盤、富士選手が放った言葉はすぐにVTRでクリアに再生されました。もしかしたらこんなシーンがあるかもしれない...、そんな創造力と、妥協せずそれに応えようとする技術力が見事に融合した瞬間でした。視聴者が求めるものを想像して、システムを作るための労力を惜しまない。カンテレのマラソン中継は今後もまだまだ進化していきます!

制作技術局制作技術センター
鈴木智雄



届け!!若者たちへ!

今回の大阪国際女子マラソンでは、番組をスマホやタブレットなどで視聴できるように、「TVer(民放公式テレビポータル)」でライブ(同時)配信を行いました。おもしろ動画を用いた公式SNSでの宣伝やLINEニュースとの連携、中継移動車に「ライブ配信中!」と書かれたパネルを搭載、沿道で応援している人へQRコード付きのカイロの配布など、家にいなくてもスマホで番組が見られるということを知ってもらうかに力を入れました。その結果、想定していたよりも多くの方に視聴してもらうことができました。今後もカンテレの番組をより多くの若者に見てもらえるような展開を考えていきたいと思えます!



編成局
メディア戦略部
上月典弘



カンテレアナウンサー朗読会 vol.18 「おはなしの暖炉」



視聴者と地域の皆さまを招待して開催する「アナウンサー朗読会」。18回目を迎えた今回はクリスマスの時期に開催しました。みんなが幸せを感じるお話、くすっと笑えるお話、あとからほっこりするお話、そして、竹上萌奈アナウンサーが、この朗読会のために書き下ろした作品も上演しました。観客の皆さんとアナウンサーがふれあい、心温まる朗読会でした。



悲しみを昇華したかった、だけで。

思っではいけないことを思ってしまったことがある。高校1年生のとき、大好きだった祖父が大病をし、亡くなった。闘病中、祖父は認知症になった。祖父は変わった。怒りっぽくなった。暴れるようになった。ある朝病院を訪ねたら、祖父はベルトでベッドに縛られていた。看護師さんに殴り掛かりそうになったそう。祖母は泣きながら謝っていた。お饅頭が好物の、温和な祖父が「怪物」に見えてきた。16歳の私は未熟でなすすべもなく、そう、思っではいけないことを思った。それから10年経った。そのときの記憶はまだ後悔とともに

残っている。いつかこの思いをきちんと燃焼させて、ふわりと浮かぶ粉みたいなものに昇華して、祖父のいる場所に届けたいと思った。それで、朗読会に向け執筆をした。自分のためだけに書いた。それなのに、点々と、他の人の心にも届いたことがわかった。恥ずかしく、うれしく、何よりもその事実を救っていただいた。素敵な機会をいただいて感謝しかない。

編成局アナウンス部
竹上萌奈



舞台 「大阪環状線」

地域に愛されたドラマが舞台化

大阪を舞台にした連続ドラマ『大阪環状線』をシーズン4まで制作して、こんなお声がけをいただきました「『大阪環状線』を舞台化しませんか」。それも会場は伝統的な演劇場である大阪松竹座。ドラマという一つのコンテンツが放送、配信だけでなく、舞台という直接観客と触れ合うジャンルにまで広がることは、本当にうれしい出来事でした。そして、



稽古場の様子



制作局制作部
木村弥寿彦



番組制作をするディレクターにとっても新しい挑戦の場になりました。私たちが日常に生活している場所がドラマになり、舞台になる。こんなに親近感が湧き、ドキドキすることってあるでしょうか。関西人に愛され大きくなったドラマが舞台化され、また新しい形で関西人に愛される。地域に根差したローカルドラマの今後の可能性を感じました。

災害から命を守るために テレビの気象解説ができること

気象予報士 片平 敦



関西テレビは2019年5月11日に『報道ランナー』でおなじみの気象予報士・片平 敦さんを講師に迎え、防災・減災をテーマとしたイベント「防災@カンテレ 片平さんとみんなで学ぼう! 防災の知恵」をカンテレ扇町スクエアで開催しました。

人々が命を守る行動をとる きっかけは?

私が関西テレビの気象解説を担当させていただくようになり15年、この間に風水害に限っても多くの災害が発生し、2011年の紀伊半島大水害や2018年の台風21号など、関西に甚大な被害をもたらしたのも少なくありません。

防災情報が多様化し、情報の意味が正しく視聴者・住民の方々に伝わらないという課題も顕在化しています。それに加え、災害が予想される際に「一人ひとりがわがことと思わず、“きっと大丈夫だろう”と根拠なく楽観視した結果、災害に巻き込まれる事例」があるのではないかと問題意識を持ちつつ日々の業務に臨んでいます。

では、住民の方々を実際の避難行動に移すきっかけは何なのでしょう。災害後の被災者の方々への取材や専門家の調査報告などで明らかになってきたのは、「信頼できる身近な人」からの声かけが実際の行動につながるということでした。消防団の方々が直接玄関の扉を叩いて避難を促すことで避難行動に移った方々がことも広く報じられました。



「防災@カンテレ」片平 敦さん

テレビに求められるものは「信頼」

では、テレビの防災報道や気象解説の役割はどこにあるのでしょうか。気象庁の調査によれば、天気予報の入手先として「テレビ」をあげる人は全体の9割近くにも上っています。しかも、テレビの天気予報は毎日欠かさず放送されるものですから、日々の取り組み次第で、視聴者・住民の方々と「身近」で「信頼」のある関係を築くことができるはず。そして、そうした信頼があれば、いざというとき、危機を伝えるわれわれの言葉が心に響き、実際の行動に結びつくのではないのでしょうか。私はそう強く信じて、日頃から解説業務にあたっています。

さらに、日々の解説で築けた信頼をさらに強めるために、視聴者・住民の皆さまと直接お話しできる防災イベントはとても大切な場だと感じています。普段の放送よりも多くのことをお話しできますし、何よりも最も大切なことは、視聴者の皆さまと直接



報道フロアで気象情報をチェックする



「防災@カンテレ」(カンテレ扇町スクエア)

お会いできるという点に違いありません。実際にお顔を見ながら話をできるため、来場者の方々の反応をその都度確かめながら楽しく進めていきます。ご来場者の方々と「会話」をしながら進行している実感があるのです。そして、「あなたとお話していますよ」と当事者感を強く感じていただいた場面での話は、きっと深く心に刻み込まれるのではないのでしょうか。その場でお伝えした話が、災害時に命を守る一助になればこれほどうれしいことはありません。

あなたとあなたの大切な人を守るために

また、私は「ぜひ皆さんが、周りの人に声をかけて行動してください」ということもよくお話しします。大勢の方々がご覧くださっているテレビですが、それでも私ひとりの呼びかけだけで全ての視聴者・住民の方々の命を守れるとは思えません。私たちが呼びかけた危機感をしっかりと受け止めてくださった方々が、自分自身はもちろんのこと、周囲にいらっしゃる大切な方々にも声をかけて行動してほしいのです。いわばレレーの「バトン」のように危機感や防災情報を次々と手渡していただきたいと思います。



「防災@カンテレ」

子どもたちの行動が大人を守ってくれることも

2019年の台風19号(令和元年東日本台風)の際には、事前に子どもが自由研究で自宅周辺のハザードマップ(災害危険予測地図)を作成していて、早めの避難につながったという話もありました。また、2011年の東日本大震災でも、子どもたちが津波を逃れて高台へ避難する状況を目撃して、近所の大人たちも次々と避難を開始した、という話も伝えられています。



「防災@カンテレ」

子どもたちは第一義的には当然、大人が守るべき大切な存在ですが、それと同時に、適切な行動へ大人たちを導く道標になることも少なくない存在だと思えます。子どもたちの命を守るために大人たちは全力で臨むべきですし、同時に、子どもたちが将来的には自分で命を守るように、一緒に防災・減災に取り組むことが非常に重要ではないかと思うのです。私は、これからも日々の放送だけでなく防災イベントなどで、大勢の子どもたちと積極的に交流していきたいと望んでいます。



詳細はコチラ



たまご&ひよこDAY 「ラファエル前派の軌跡展」



未来の鑑賞者を育む 開かれたアートをめざして

2017年に始めた「たまご&ひよこDAY」はあべのハルカス美術館で確実に回を重ね、2020年秋に開催した「ラファエル前派の軌跡展」で4回目を数えました。これまでは妊婦や小さな子ども連れの方を対象に、休館日を特別鑑賞日に設定する取り組みでしたが、今回からは一般の方もご入場いただけるようにしました。

美術館は奇跡の空間です。作家の多くは、歴史上の人物となっており、作品はタイムマシンのように鑑賞者の前にやってきて、作家が意図したメッセージを受け止めることとなります。創作時の時代背景は現代とは大きく異なりますが、人間の営みは基本的に同じであるということもまた知ることになります。

子育て中は、周囲への遠慮からアート鑑賞を控える人も多く、気兼ねなく楽しんでいただこうというのが「たまご&ひよこDAY」の企画意図です。子どもたちにも、作品と鑑賞者が向き合う美術館という場所を知ってもらう機会になります。子ども時代に美術・博物鑑賞の経験がある人のほうが、大人になってからも足が向かうという研究結果もあります。美術・博物館が人々の暮らしに知性と彩りを与える場であるという認知が広まればと願います。

ただ、そもそも論として、なぜ子育て中の鑑賞者が、周囲に遠慮する必要があるのかという問題があります。欧州では基本的に写真撮影やスケッチも可能ですし、対話をしながらの鑑賞が普通です。



日本では静かに鑑賞することが当然視されており、ノイズに対するクレームが多い。たとえば視覚障がい者は、同伴者との会話によって美術を鑑賞します。日本の美術館に流れるピリピリとした静けさは、子どもをはじめとする多様な人々を遠ざけることとなります。次年度は「たまご&ひよこDAY+おしゃべりDAY」として、対話を促す取り組みに進化させます。どこの美術館でも、リラックスして対話を楽しみながら鑑賞できる場になるよう微力ながらチャレンジしていきたいです。



あべのハルカス美術館

事業局事業部
迫川 緑



「だいすけお兄さんの世界迷作劇場」



親子が初めて触れる、本格ミュージカル体験

『おかあさんといっしょ』の「歌のお兄さん」として歴代最長在任記録を持つ“だいすけお兄さん”こと横山だいすけさん主演で2017年7月より全国ツアーが始まった「世界迷作劇場」。これまでにシリーズ3作品が上演され延べ25万人以上に楽しんでいただきました。

関西テレビは初回以来、近畿エリアに限らず全国100回以上の公演に主催や特別協力として関わってきましたが、2018年の2作目からは、企画内容から全体のツアー日程までさまざまな分野でより多くの子どもたちに楽しんでもらえるように考えて取り組んできました。

公演により深く関わるようになってからは、横山だいすけさんをはじめ、舞台の総合演出や振付・音楽を手掛ける方々などと多岐にわたって意見交換する場面が増えていきましたが、全作品で主軸となっているコンセプトは『親子が初めて触れる、本格ミュージカル体験』の一言に尽きます。

作品は世界のおとぎ話をアレンジして幅広い音楽で紡ぐミュージカルパートと、会場一体となって歌うコンサートパートを約60分に詰め込んだ2部構成で、劇中歌のベースとなるカラオケは日本有数のミュージシャン・斎藤ネコさんが編曲を担当、各演奏パートにも国内著名アーティストが名を連ねます。また、舞台に立つアンサンブルキャストは毎回オーディションで選ばれ、「レ・ミゼラブル」や「ロミオ&ジュリエット」といった大作ミュージカルに出演歴のあるメンバーも出演しています。こうして“人生で初めて



「だいすけお兄さんの世界迷作劇場(パート3)2019-20」

の体験だからこそ、本物を!”との想いで制作された作品に子どもたちは一喜一憂し、さらにお母さんと離れて泣く子もいれば、家に帰りたい!と怒り出す子もいます。横山だいすけさん曰く「それもひっくるめて迷作劇場、何をやっても良い空間なんですよ!」と。全国どこの劇場でも子どもたちのさまざまなリアクションが新鮮で、その反応を通して受け取る新たな感動が出演者や制作スタッフにとっては次の公演への糧となっていると感じます。

残念ながら新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、あらゆるエンターテインメント公演の先行きが見えない状況となってしまいましたが、「世界迷作劇場」スタッフ・関係者一同、一日も早く再び全国の子どもたちに作品を届けられる日が来ることを心より願っています。



「だいすけお兄さんの世界迷作劇場(パート2) 2018-19」

事業局事業部
大藪 竜介



里親シンポジウム

新しい家族の絆を考える

現在全国には、何らかの事情により親と一緒に暮らせず、社会的養護を必要とする子どもが約4万5千人います。しかしその多くは施設で暮らすことを余儀なくされています。こうした現状を受け、国は、家庭養護の重要性に注目し、里親制度の普及促進に力を入れています。関西テレビは大阪市と大阪市里親会に協力して、10月19日に「しせつの子どもたち里親さんちの子どもたち」と題したシンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、家庭養育や里親の



司会・進行の関 純子アナウンサー

必要性について、里親や里子がその体験を通じた話をしたり、児童養護施設の職員が施設で暮らす子

どもたちの様子を撮影した映像を紹介するなどして、問題の認識を深めました。参加者からは「里親になってよかったことは？また大変だったことは？」といった質問や「自分も里親になることを考えたい」との声が寄せられました。また、シンポジウムを通じて里親になってみたい、もっと詳しく話を聞きたいという人のために、里親相談会も設けられ、参加者でにぎわいました。

関西テレビはこれからも、里親シンポジウムなどを通じて、里親制度の周知・充実にに向けた取り組みについての支援を続けていきます。



児童虐待防止キャンペーン

番組やCMを通じて支援・協力

関西テレビは1980年代から「児童虐待防止キャンペーン」に取り組んできました。1990年には児童虐待防止協会が設立され、電話相談「子どもの虐待ホットライン」が始まりました。2019年度、協会への電話相談の件数は1206件。新型コロナウイルスの感染拡大により、3月に入って家族（子どもや配偶者）の在宅が続く中、先行きへの不安やり患の心配



子どもの虐待ホットライン

などでストレスを募らせている方からの相談が増えている状況です。相談は子育てに悩む

母親からのSOSが主な内容です。協会の相談員はSOSを発信した母親に寄り添って耳を傾けます。また、協会は講演会や市区町村へのスーパーバイザーの派遣などを通じて、虐待問題にかかわる専門家や担い手を育てています。関西テレビはこれからも協会を支援し、児童虐待防止キャンペーンに取り組んでいきます。



詳細はコチラ



CSR推進局放送文化推進部
石田善久



FNSチャリティキャンペーン

ウガンダの子どもたちに寄りそって

2019年度は、東アフリカに位置する赤道直下の国、ウガンダ共和国が支援国でした。ウガンダは世界で最も貧しい国の一つで、子どもたちは厳しい状況に置かれています。貧困家庭出身が多い児童婚は、幼い女の子が自らの意思に反して18歳未満で結婚させられ、学校を退学し、家庭内暴力に苦しみ、HIV/エイズに感染する確率が高まります。また、ウガンダはHIV/エイズの感染拡大防止への対策が成功した国として知られますが、現在でもエイズが原因で親をなくした子どもは300万人以上に及びます。現地の様子につい



ては、現地取材をしたフジテレビの森本さやかアナウンサーの協力を得て、『カンテレ通信』のスタジオで報告してもらったり、東大阪市の樟蔭中学校・高等学校と協力して現地報告会を開催しました。また、アナウンサー朗読会や大阪国際女子マラソンの会場で、募金を呼びかけたほか、社内では、お菓子のチャリティセールや不要書籍の販売による募金で大勢の方のご支援をいただきました。



現地報告会



詳細はコチラ

CSR推進局放送文化推進部
武田直子



公益財団法人 関西テレビ青少年育成事業団

キャンプで子どもは成長する

最近アクティブラーニングという言葉をよく耳にします。意味の一つに「主体的、体験的な学習スタイルによってより深い学びを得る」があります。

キャンプでおなじみの野外炊飯。子どもたちと大学生リーダーが手分けして野菜を切ったり薪で火を起こしてご飯を炊いたり。青少年育成事業団のキャンプでは大切な約束事があります。包丁を持って移動するときは「刃物通ります」。炊きあがったご飯の鍋をテーブルに運ぶときは「熱いもの通ります」と



声をかけながら移動するのです。子どもたちは2人がかりで大鍋を持って声を出し

周囲に注意を促します。子どもならではの気まじめさで「○○ちゃん言うてない」「ちゃんとやったわ〜」などと言いながら、これを繰り返していくことで「ケガに対するリスク管理の意識」や「周囲への気遣い」という成長につながります。楽しい体験を重ねながら深い学びを得られる。まさにアクティブラーニング。これこそキャンプの教育的効果です。事業団はこれからも子どもたちの成長につながる活動を続けていきます。



詳細はコチラ

事務局長
石巻ゆうすけ



テレビ局が持つ「伝える力」での研究支援に感謝

京都大学iPS細胞研究所
所長・教授

山中伸弥



Center for
iPS Cell Research and
Application

京都大学
iPS細胞研究所

京都大学iPS細胞研究所(CiRA=サイラ)では、iPS細胞技術を患者さんにお届けするために、基礎研究から応用研究までを一貫して行っています。また、公的な研究費に加え、「iPS細胞研究基金」を設置して、寄付金を一般の方から募り、研究を加速するために活用しています。CiRAでは2016年からの3年間、関西テレビ様のご協力をいただき、なんでもアリーナで「CiRA×カンテレ 京都大学iPS細胞研究基金講演会」を開催させて頂きました。

テレビ局ならではの「伝える力」

大学が行う講演というと学術的な固い内容になりがちですが、参加者に少しでも興味を持ってもらえるように、私や研究者からのプレゼンテーションの後は、その内容を紐解くトークセッションを設けてくださっていました。村西利恵アナウンサーが、一般の方に代わって研究の分かりにくい部分について様々な質問を投げかけてくださり、我々がそれに楽しく答えていくことで、自然と参加者の方々の理解が深まっていくという素晴らしい

場でした。また、2019年の回では、iPS細胞を製造している技術職員の仕事を参加者の方々に知っていただくために、ステージ上に「アイソレーター」(細胞培養などに使う設備)の模型を準備くださいました。さすがプロフェッショナルと感動し、テレビ局の伝える力の神髄を見た思いでした。当日の様子は、関西テレビ様のYoutubeチャンネルで公開されています。ぜひ多くの方にご覧いただきたいと思います。

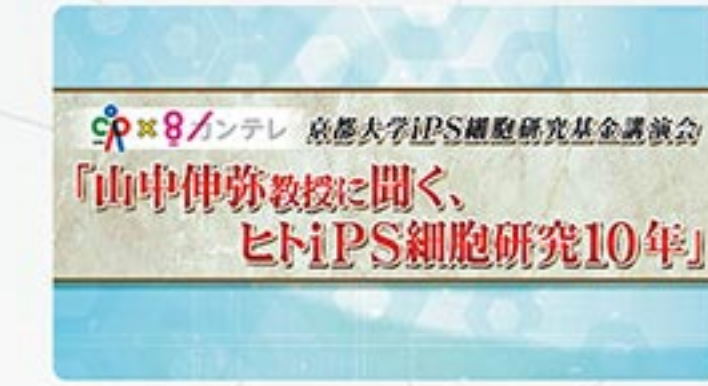
iPS細胞は、私が奈良先端科学技術大学院大学にいたときに研究を開始し、京都大学に移った後に論文発表した、関西発の技術です。地元のテレビ局である関西テレビ様のご協力によって、「この技術を一般の方々にもわかりやすいように発信したい」という願いが叶った3年間でした。



細胞培養作業の様子を実演する山中教授

「伝える力」は寄付文化を広める力にも

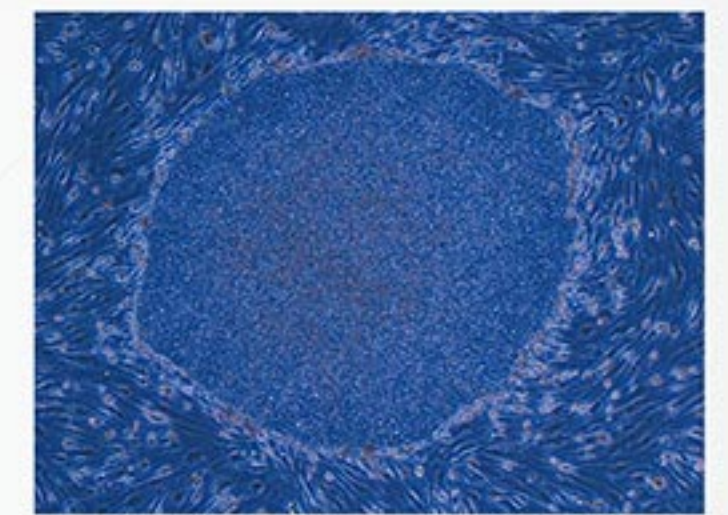
あらためて感謝申し上げたいのは、この共催の講演会に「iPS細胞研究基金講演会」とタイトルをつけていただき、CiRAのご寄付者を、毎年ご招待させていただけたことです。ご寄付者の中にはご自身やご家族が患者さんである方も多く、研究の進展を切実に願っておられます。そうした方々に研究を分かりやすく伝える場を提供して下さることは、日本の寄付文化の発展にも貢献しているものと思います。



新しい医療を、良心的な価格で多くの人へ

医療・医学の分野では、近年、数千万円から1億円を越えるような超高額の医薬品も発売されています。医薬品の価格の面では、SDGsでも言われているような公正・平等な社会には程遠いのが現実です。CiRAではiPS細胞の製造技術をより良いものにし、出来る限り良心的な価格で多くの人へ新しい医療を届けたいと考えています。

病気の克服は、患者さんや医療従事者の夢であり、寄付者の方々の夢でもあります。多くの人へ、より健康な生活を届けるために、これからも皆様のご協力をお願いしたいと思います。関西テレビ様には、「伝える力」によってこの目標に大きく貢献くださったことについて、深く感謝申し上げます。



線維芽細胞から樹立したヒトiPS細胞のコロニー(集合体)
(コロニーの横幅は実寸約0.5ミリメートル)
©京都大学教授 山中伸弥



CiRAxカンテレ 京都大学iPS細胞研究基金講演会(カンテレ扇町スクエア なんでもアリーナ)



詳細はコチラ



ザ・ドキュメント
『人生被害～あるハンセン病家族の歳月～』



「深刻な人権侵害」を繰り返さないために

ザ・ドキュメント『人生被害～あるハンセン病家族の歳月～』は、ハンセン病元患者と家族の苦しみについて取材したドキュメンタリーです。

若い人にはなじみがないと思いますが、ハンセン病は、らい菌という細菌による感染症です。明治に患者隔離が始まり、昭和には一生隔離するという法律ができました。国や自治体に「恐ろしい伝染病」と恐怖をあおられ、隣人を患者として密告するうちに、人々の心にハンセン病に対する差別や偏見が深く根付いたという歴史があります。医学的に誤ったことが真実のように扱われ、深刻な人権侵害が何十年も続きました。政策の音頭を取ったのは国や自治体ですが、偏見や差別の実行部隊は、友人や知人、そして自分にも差別が及ぶことを恐れた身内の人たちでした。

この問題は、2001年に国が元患者の人たちに謝罪、補償したことで終わったかのように思われていましたが、被害はより広く深く、周囲の人たちの人生にも及んでいました。その問題を、私たちはこの数年間、取材してきました。

2019年11月に放送した、ザ・ドキュメント『人生被害』は、「ハンセン病元患者の家族」が3年にわたる国賠訴訟をどう闘い、最終的に勝訴判決を得るまでを描いています。元患者の子どもや兄弟は、就職・結婚、さまざまな場面で深刻な差別を受けてきていて、この裁判で初めて、その“人生被害”の全容が表に出てきました。支援者や弁護士、私を含む記者など、この問題にかかわってきた人は、家族の被害



ハンセン病家族訴訟 国の責任をみとめる判決



を知っていたはずですが、結局のところ、自らの人権・人生被害を真剣に考え抜き、立ち上がったのは当事者の方たちでした。

あまり知られていませんが、関西にはハンセン病の元患者の人が多くいます。都市部では人間関係が希薄なので、元患者が目立たず暮らせるからです。そうしたことから大阪にハンセン病療養所を退所した人の会や支援センターもあり、放送エリアにはこの家族訴訟の原告が約70人もいました。

2016年、家族訴訟の提訴を知り取材しようとしたが、原告の多くが配偶者など身近な人にすら家族の病歴を隠していて、取材は困難でした。そのなかで、取材をうけてくれたのが尼崎市職員で在日朝鮮人2世の黄光男さんでした。「恥でないものを恥とするとき、本当の恥になる」という原告団長の言葉を何度も口にしながら、自らを奮い立たせるようにして、カメラの前で話してくれました。その言葉には、私たちの社会が学ぶべきものがたくさんあったと思っています。

新型コロナウイルスという感染症が世界中に拡大し、防護服の人が消毒液を噴射する海外映像を見ると、ハンセン病の裁判で聞いた「家が真っ白に消毒され、差別がはじまった」という言葉が思い出されます。アジアの人が差別されたり、感染者・家族が忌避されたりするなど、似た出来事も増えてきました。未知の事態や恐怖に、どう理性的に向き合うか。同じ過ちを繰り返さない社会であってほしいと思っています。



報道局報道センター
柴谷真理子



ドラマ
『パーフェクトワールド』



いつかこのドラマがただのありふれたラブストーリーになりますように

建築士・鮎川樹(松坂桃李)と高校の同級生・川奈つぐみ(山本美月)が12年ぶりの再会を機に心を通わせる物語です。テーマは障がいのある恋。樹は事故で脊髄を損傷、車いす生活を余儀なくされているため、障がいと真摯に向き合う決意で制作に臨みました。

クランクイン1年前から障がいがある方や医療従事者に取材をしました。「日常生活を送る動作」はじめ「排泄はカテーテルを使うため、トイレの問題が最も大事」「褥瘡など合併症の不安」など、知らないことが多々ありました。そして、障がいがある方の奥さまからは、結婚に至るまでの苦労、家族としての向き合い方など、脚本制作に関わる貴重なお話を伺いました。



駅での撮影風景

このような事前準備を通じ、ゴールとして「完璧な人間なんていない。誰もが欠けている部分がある。でも、それを補い合うことが大切」を表現しようと制作しました。主演の松坂さんも取材に参加、障がいがある方と接しているからこそ、撮影現場では車いすの監修の先生に、細かい動作を逐一確認しながら覚悟を持って演じてくれました。

このような事前準備を通じ、ゴールとして「完璧な人間なんていない。誰もが欠けている部分がある。でも、それを補い合うことが大切」を表現しようと制作しました。主演の松坂さんも取材に参加、障がいがある方と接しているからこそ、撮影現場では車いすの監修の先生に、細かい動作を逐一確認しながら覚悟を持って演じてくれました。



ドラマで世の中を一変させようとはまでは思いません。ですが、「知らない事を知る」きっかけとなり、少しでも障がい者への認識が変わって欲しいという思いで制作しました。キャッチコピーにはそんな願いを込めています。放送後、カンヌで開催されるテレビ番組の国際見本市「MIPCOM」の多様性優秀番組賞の最終候補にノミネートされました。惜しくも受賞は逃しましたが、世界の潮流を感じました。

今、まさに多様性を認める社会が求められていると思います。人によって捉え方は違うと思いますが、テレビ局の強みは、エンターテインメントで多様性を表現できることだと思います。届けた番組によって、視聴者が何か新しい価値に気づききっかけとなれば、制作者としてこれ以上うれしいことはありません。



制作局東京制作部
河西秀幸



『パーフェクトワールド』松坂桃李さんと山本美月さん



「子ども×人権 テレビドキュメンタリーを通して人権を考える」



大阪法務局との初コラボイベント

大阪法務局が主催する「中学生の人権作文コンテスト」には2009年から後援という形で関わってきました。今回、法務局からコンテストの表彰式で、人権啓発につながる催しを共催しないかという提案をいただき、関西テレビが過去に放送したドキュメンタリーを上映し、制作者がそこに描かれている人権保護への想いを語るイベント「子ども×人権テレビドキュメンタリーを通して人権を考える」を企画しました。12月1日に開かれたイベントは、前半が「中学生の人権作文コンテスト」の表彰式と最優秀作品の受賞者3人による朗読です。「加害者家族の人権を考える」「養育里親の実子から見た里親制度」「LGBT『Q』とは」など、最近の中学生を取り

巻く人権の問題が多岐にわたっていることを感じさせられました。

後半は、2017年3月に放送されたドキュメンタリー『夢への扉「課題研究」～先生を越えて進め～』の鑑賞です。民放連優秀賞など数々の賞を受賞した作品で、大阪府立松原高等学校の授業で“いじめ”や“虐待”といった人権課題に取り組んだ生徒の姿を描いています。アフタートークでは、報道センターの宮田輝美ディレクターが「母となった自分だからこそ“子どもの虐待”をテーマにしたいと思って取り組んできた。表現方法などで画面に映る彼らやまわりの人々を傷つけていないか悩みながらの番組作りだった」と話しました。今回のイベントは、テレビ局ならではの人権イベントであるとともに、テレビ局の財産である番組の新しい2次利用のひとつであり、制作者がダイレクトに視聴者の反応を感じられる貴重な機会となりました。



カンテレ扇町スクエア なんでもアリーナ



詳細はコチラ

CSR推進局放送文化推進部
武田直子



「ともいき 第17回 共に生きる障がい者展」



“ともいき”って、何？

「大阪府の障害福祉室ですが・・・」そんな電話から始まった“ともいき”は「共に生きる障がい者展」の略です。大阪府民に障がいや障がいのある人を正しく理解してもらいたいと、11月に堺市のビッグ・アイで開かれました。総合司会の毛利一郎アナウンサー

は車いすバスケットボールの実況や体験会まで大活躍、少しでもお役に立てればという思いでした。

CSR推進局放送文化推進部
稲本謙三



野球の生中継で解説放送に挑戦！



解説放送とは、主に目の不自由な方にテレビを楽しんでいただくため、音声だけでは伝えきれないト書き的な状況描写、例えば場面設定、出演者の表情やアクションなどをナレーターが補完解説して、主音声の隙間に副音声でお伝えするものです。その性質上、生放送での対応は非常に難しく、今まではドラマなどの収録番組に付与してきましたが、生放送の醍醐味のひとつともいえる野球の生中継で、解説放送にチャレンジしてみることにしました。生放送で主音声のコメントやナレーションを邪魔しないように、解説放送を

入れていくことは、不可能だと思っていましたが、現場から実況なしの球場音を送ってもらい、そこに関西テレビ本社でアナウンサーが解説実況をつけることで実現できました。解説放送を通じて目の不自由な方が、スポーツの魅力に触れ、楽しいと感じていただけるよう今後も研究を重ねていきたいと思えます。

編成局編成部
毛利千保



野球中継で実況する際心掛けているのは、見てわかる「今」よりも「今後起こること」を視聴者にどう想起させるか、ということです。一方で、目の不自由な方に向けた放送である解説放送で意識したのは、より「今」起こった出来事をわかりやすく伝える、ということでした。例えば、3ボール2ストライク・フルカウントになったとき、本来の野球中継であれば…次のバッターが誰であるか、この後のピッチャーの心理やバッターの心理など…話を展開していきますが、解説放送では、投げた球はどんな球種だったのか、

その球がストライクだったのか、ボールだったのか、バッターはどんな反応だったのか…などなど今起こったことをわかりやすく伝える力が求められます。限られている時間の中でも、「今」に比重を置いて切り取るか、「未来」に重きを置いて表現するのか。表現力とともに、判断力、思考力が求められる機会になりました。

編成局アナウンス部
吉原功兼



通常、解説放送は収録番組にナレーターが補完解説を施し音声編集して放送に至りますが、今回は生放送で解説放送をしたいと提案がありました。普段の野球中継では実況、解説に加え現場の臨場感に重きを置いてミキサーしますが、今回は映像なしでも現場の状況を細かに理解してもらえるよう、特に吉原アナウンサーの解説実況をクリアに聞か

せることを念頭に置いてミキサーしました。目の不自由な方をはじめ、さまざまな視聴者に番組を楽しんでもらえるよう今後も続けていきたいと考えています。

制作技術局制作技術センター
長谷川周作



関西テレビ番組審議会

番組は言語でつくられる



「超える。カンテレ」「カンテレ変えてみた」「実、はカンテレ」……。関西テレビにはその時期ごとのキャッチコピーがある。それぞれの意図がどういう意図でつくられたのか、視聴者に何を伝えようとしているのか、局側の方々にお聞きしたことがないので知らない。でも、それぞれに、受け手側はなんとなくその意図を感じ取っている。なかでも「実、はカンテレ」は「実、こそが大事だ」という強いメッセージを感じ、いい意図だと思った。こうしたイメージを伝えるのは言葉である。言葉によって自分の考えを相手に伝え、相手の言い分を聞き取り、日本や世界でおきているさまざまな事象を知ることができる。AIもITの世界も文化も文明も言語によってつくられてきた。テレビ局におられる皆さんは映像を第一義に想起されるかも知れないが、番組もその映像も言語によってつくられ、良き方向に行くか悪しき方向にいくかも言語に影響を受ける。このところ、文化庁の国語に関する世論調査の新聞

報道を読むたびに唖然とする。国語力の低下が深刻化していることに、である。私自身もその中にあり、キーボードに触れている間に漢字を忘れてしまったから偉そうには言えないのだが、映像を伴う番組づくりは言語であることを改めて意識してほしい。相手の言っていることを正しく理解し、自らは相手にしっかり伝わる話し方、書き方をすることが大事、ということ。本を読まない人たちが増えているという。読書は言語量、表現力、想像力、感性までも高めていく効果をもたらす。読書習慣を呼び戻し、番組は言語でつくられることを思い出してもらえれば、と思う。



関西テレビ番組審議会 委員長
上村洋行 (司馬遼太郎記念館館長)

2019年度 番組審議会 審議番組

- 2019年
- 4月 カンテレ開局60周年特別ドラマ『僕が笑うと』
- 5月 『新説!所JAPAN』
- 6月 『こやぶるSPORTS』
- 7月 ザ・ドキュメント「舌禍『暴言』市長は圧勝した」
- 8月 休会
- 9月 『TWO WEEKS』(第1話)
- 10月 『遥かなるTOKYO 女子マラソン五輪代表選考の裏側』
- 11月 『マルコポロリ!SP 天才たちはこうして育てられた!親たちが実践した“驚きの教育法”』
- 12月 休会
- 2020年
- 1月 『やすとも・友近のキメツケ! *あくまで個人の感想です』
- 2月 『報道ランナー防災SP その時、あなたは逃げますか?つなげ防災情報のバトン』
- 3月 臨時休会(新型コロナウイルス感染症拡大のため)



審議中の番組審議会



オンブズ・カンテレ委員会

『胸いっぱいサミット!』への意見



私の大学時代の同級生に、スイス在住のAさんという人がいますが、今年に入ってフェイスブックに次のような体験談をあげていました。

Aさんが買い物をしていると、旧知の人を見かけたので、これまでしてきたように挨拶し、ハグしようとする、一瞬相手はたじろいだとのこと。Aさんはその時、「あ、この人は私をAとしてではなく、まず東アジア(新型ウィルスが蔓延しているらしい地域)の人として認識している」と感じたそうです。日本からヨーロッパに移り住んでもう何十年になるけれど、まあ外見は東アジア出身まるわかりだから、たじろぐ気持ちもわかるけど、とも述べていました。

あるカテゴリーで括られ、そこに属する人はすべからくこうであると決めつけられることのしんどさを、皆感じたことがあると思います。〇〇人だから、男or女だから、△△卒にしては、××世代にしては、あの年代の割には……。そうした言い方をここでは「カテゴリー・トーク」と名づけておきます。

「手首を切るブス」発言も、「韓国人気質をよくご存知の」というフリから入っている以上、韓国籍を有する人々、韓国に何らかのアイデンティティを感じている人々すべてに向けられた言葉となっています。韓国政府の外交政策への批判であってそれ以上の他意はない、とはなりません。発言者自身は、身近な韓国人に対する愛憎並存(アンビバレント)な気持ちを発露したのですが、それを周囲が韓国(人)全般に対する否定的な

物言いにつなげていったように私にはみえました。

もちろん、カテゴリー・トークすべてをテレビから排除せよというつもりはありません。互いの県民性や地域柄をあげつらいあうような番組も、まあそれが文化人類学でいうところの冗談関係(ジョーキング・リレーションシップ)——お約束的に相手の欠点を言いあう儀礼・コミュニケーション——として成り立っているのなら、とくだん問題はないでしょう。ある街をとりあげて、変わった人が多い、強烈なキャラクターの持ち主ばかりであるとイジったとしても、最後にその街のよい点や愛着の語りで締めくくるといったバランス感覚があれば、そこに住む人たちも嫌な気持ちにはなりません。

今回の場合、そうしたバランス感覚が働かず、あるカテゴリーの人々、しかもこの社会においてマイノリティである人々全体にむけて、一方的に否定的な表現を投げかけ、その人権を軽視する結果となってしまったと、オンブズ・カンテレ委員会の一人として考えました。

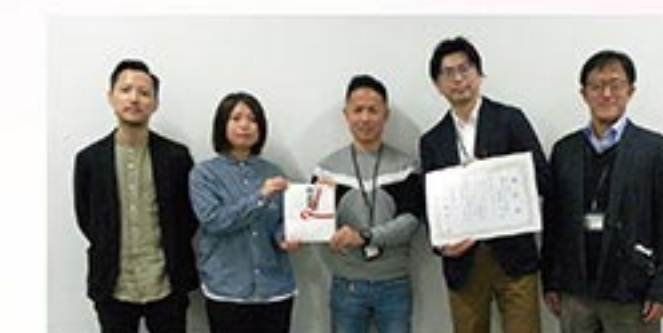
誰もががついついしてしまいがちな「カテゴリー・トーク」ですが、日頃からもう一段センシティブでありたいものだ、自戒の念もこめて記しておきます。



オンブズ・カンテレ委員会 委員
難波功士 (関西学院大学社会学部教授)

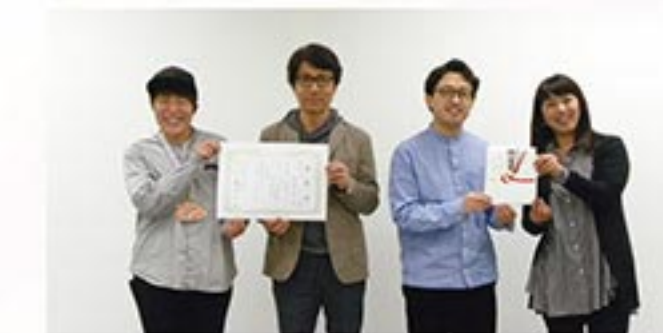
オンブズ・カンテレ委員会 特選賞2019

オンブズ・カンテレ委員会特選賞は、社員に対して応募を呼びかけ、社員による投票のあと、オンブズ・カンテレ委員会が審査し、決定されます。



番組・DVD部門

番組・DVD部門 | 報道局：
ザ・ドキュメント「裁かれる正義 検証・揺さぶられっ子症候群」



その他活動部門

その他活動部門 | 事業局事業部・制作局制作部：
番組連動イベント「よ〜いドン!歌謡祭」

『胸いっぱいサミット!』 放送からBPO意見通知を受けるまで

2019年4月6日と5月18日の『胸いっぱいサミット!』で、出演者が「手首を切るブスみたいなもの」と発言した部分を、当初「国の外交姿勢を擬人化して表現したもので、差別的な意図はない」と考え放送しました。その後さまざまな批判を受けて社内であらためて議論し「さまざまな感じ方をされる視聴者の皆さまへの配慮が足りず、心情を傷つけてしまう可能性のある表現であり、そのまま放送するという判断は誤りだった」との結論に至りました。この件については、2019年6月23日の『カンテレ通信』で、当初の関西テレビの見解に対し、コメンテーターの方から「『差別的意図はない』というのは作り手のエゴであり、受け手が傷つけば大きな問題につながることをわかっていない」というご指摘、9月2日に、オンブズ・カンテレ委員会から「『外交姿勢の擬人化』にとどまらず、広く韓国籍を有する人々などを侮辱する表現であって、公共性の高いテレビ番組では放送されるべきではなかった」との見解を受けました。

また本件はBPO・放送倫理検証委員会で審議され、2020年1月24日に「人種・性別・職業・境遇・信条などによって取り扱いを差別しない」「人種・民族・国民に関することを取り扱うときは、その感情を尊重しなければならない」と定めた民放連放送基準や、「すべての人は人種、皮膚の色、言語、宗教などによって差別を受けることは許されることではない」「私たちは、人間の尊厳に敬意を払い、多様性を尊重します。人種、性別、宗教、国籍、職業などによって差別を行わず、名誉、プライバシーなどの人権を守ります」とした当社の「番組制作ガイドライン」「倫理・行動憲章」に照らし合わせた上で、「放送倫理に違反するものだった」との意見通知を受けました。

(CSR推進局法務・コンプライアンス部)

「メディアと人権と表現の自由を考える研修」 ひとりひとりの「感度」をあげる取り組み

今回の事案発生以降、関西テレビは関係セクションを中心に議論を重ねました。「そのまま放送するという判断は誤りだった」との結論に至る中で、「配偶者がコリアンだと明言している出演者の発言を、差別と考えるのか?」「論旨全体ではなく、この言葉のみを切り取って問題視するのはどうか?」との意見もありました。



金光敏氏

そこで、さまざまな立場の外部の方のご意見を伺い、社員、スタッフの人権意識の向上や考えを深化させることが必要と考え、「メディアと人権と表現の自由を考える研修」を、これまでに3回開催いたしました。

第1回は2019年11月1日に「在日コリアンから見た「日韓問題」とメディアの現状」について金光敏氏(コリアNGOセンター事務局長)に、第2回は12月3日に「ヘイトスピーチと表現の自由」と題して安田浩一氏(ジャーナリスト)に、第3回は1月15日に「LGBTと表現」を

テーマに村木真紀氏(特定非営利法人 虹色ダイバーシティ代表)にご講演いただき、社員・スタッフとの質疑応答、意見交換を行いました。

金光敏氏は「今社会の中で、居場所がなくて苦しみに耐えかねて、自らや他者を傷つけたりしている子どもたちが大変多い。テレビは今でも、子どもたちの情報源の多くを占めているが、日韓を含めた東アジアの近現代史の無知や無理解の上に一部の番組作りが行われ、受け入れられているという現実を、テレビに携わっている皆さんにわかってほしい」、安田氏からは「海外ではI have a black friend(私には黒人の友人がいる)」という表現は、黒人差別者の常套句と認識されている。差別する意図はなかった、というのは何のエクスキューズにもならない。問題なのは、その言葉を受けた人がどう思ったか、そして社会にどんな影響を与えたかということ」「憎悪というエネルギーを与えているのは、ネットや



安田浩一氏



村木真紀氏

テレビなどのメディア。その抑止力として、ここにいらっしゃる皆さんこそが一番大切。これ以上社会を傷つけたり、分断させないためには、『どんな理由があっても差別は許さない』と言い続けるしかない』などのご意見、また村木氏からは、カミングアウトの難しさやアウティングへの危機感といったLGBTの方の実情や、番組作りや取材の際の留意点などについて、ご自身の経験も交えながらお話をいただきました。

この研修に限らず、さまざまな意見や考えに耳を傾け、咀嚼し、いかに自分の感性のアンテナの精度を上げていくか、いかにその成果を番組に反映していくかが、当社に課せられた「宿題」だと思います。結果は一朝一夕にあらわれるものではありませんが、地道に愚直に取り組んでまいります。

CSR推進局
法務・コンプライアンス部
佐藤洋介



『カンテレ通信』によせて

すべての人が情報の受け手であり送り手になる時代の、メディア情報への耐性を強化する番組とは

『カンテレ通信』のコメンテータを始めて、半年が経過しました。やってみて良かったと思うことの一つは、「メディアの送り手として考える」体験です。これまで新聞紙面審議会やテレビ番組審議会の委員などは経験しましたが、そこでは受け手代表としての意見が求められます。しかし、インターネットが普及した今日、私たちはだれもが情報の受け手であると同時に送り手です。その意味で、テレビ視聴者が送り手の発想を知り、制作者が受け手のまなざしを共有することは必要なことです。



『カンテレ通信』スタジオ

インフォデミックに耐えるメディアリテラシー

さて今年、2020年は世界史年表に「新型コロナウイルスのパンデミック(世界的大流行)の年」と記録されるでしょう。WHO(世界保健機構)はそのパンデミックを宣言する以前からインフォデミックへの警告を繰り返していました。それはインフォメーション(情報)とエピソード(疾病流行)を組み合わせた造語で、「根拠のない情報の広範囲にわたる拡散、それに伴う社会の混乱」を意味します。

確かに、品不足という流言が広まり店頭からトレットペーパーが消えました。もちろん日本国内の紙生産は安定しており、品不足になる状況にはありませんでした。しかし、一部メディアは消費者の買い溜めをパニック(恐慌)と報道しました。それは本当にパニックだったのでしょうか。パニックとは「突発的な不安や恐怖によって引き起こされる錯乱行動」を

意味します。メディアが「パニック」と報道すれば一時的な品不足が発生することはだれでも予測できます。それを見越して備蓄するのは極めて合理的で、決して「錯乱」とは呼べないはずで、それにもかかわらず、メディアが「パニック」を使う理由としては、報道関係者が状況を「第三者効果」の視点で見ているためでもあるでしょう。第三者効果とは、メディアの影響を受けるのは自分以外の大衆(第三者)であり、自分たちはそれに踊らされないと考える心的傾向を示す認知仮説です。しかし、パニック報道から悪影響を受けたのは視聴者だけでしょうか。むしろ、そうした情報に最も多く触れたのは制作者のはずである。この場合、受け手よりも送り手側が深刻な混乱状態に陥っていた可能性も否定できません。

こうした状況を加速させたのが、バイラル(感染)メディアと呼ばれるSNSの普及です。すべての受け手が情報の送り手になる時代に、いま問われているのは「受け手=送り手」である私たち全員のメディア情報に対する耐性です。『カンテレ通信』はその耐性を強化する番組であって欲しいと思います。



CSRセミナー

『カンテレ通信』コメンテーター
京都大学大学院教育学研究科
教授 佐藤卓己



自社検証番組
『カンテレ通信』

番組制作者と視聴者が相互に理解しあうことが番組のめざすメディアリテラシーであると考えています。京都大学大学院・佐藤卓己教授が新たにコメンテーターに加わったことで、「メディア史」「テレビ史」的考察も加味されました。そこで『カンテレEYE』のコーナーでは報道・制作の現場に密着する今までの「情報公開」に加え、「LGBTを通じてテレビの表現と人権を考える」といった極めて難しい題材にも取り組むことが可能になりました。同じくコメンテーターのわかぎふささんの「まさかのカミングアウト」というオマケハプニングもありましたが(笑)。そんなエッジの効いたお二人、そしてと林・関というベテランMCとともにテレビのこれからを考えるさまざまな企画にチャレンジしていきます。



左から林弘典アナウンサー、わかぎふささん、佐藤卓己さん、関純子アナウンサー



詳細はコチラ

CSR推進局放送文化推進部
武藤良博



その他の取り組み

社屋の節電対策

東日本大震災から9年。節電意識が薄れつつあるなか、ここ数年の台風、豪雨被害の甚大化に直面し、地球温暖化防止のため、節電に取り組んでいます。

2019年度より以下の節電策を導入しました。

- ①エレベーターの夜間の一部停止
働き方改革による残業時間の減少もあり、20時から翌朝8時まで、4基あるエレベーターのうち2基を停止することにしました。それにより前年比で月500kWを節電しています。
- ②スタジオの空調の運用の見直し
関西テレビには、3つスタジオがあります。広さが155坪~200坪で、高さが14メートルもあり、空調には専用機を2台ずつ使用しています。しかし、セットの建て込みと解体作業時には大きな発熱源である撮影用の照明を点灯していないため、2台のうち1台を停止することにしました。これで、月平均5,000kWを節電しています。

いずれも、年々変わる労働環境や長年の慣習を見直すことで実現できたことであり、来年度も引き続き見直し作業を続けていきます。

総務局総務部
安東 忍



祇園祭ごみゼロ大作戦



祇園祭からゴミをなくそうと市民や行政、大学や露天商などが協力して始まったこの取り組みに関西テレビも参加しています。この祇園祭ごみゼロ大作戦では宵々山と宵山の二日間、露天商や売店に繰り返し洗って使用できるリユース食器を導入しました。使い捨て食器ではゴミが増えるばかりなのでごみゼロをめざすにはまず食器から。使い終わったリユース食器は、ボランティアが待機するエコステーションへ持ち込んでもらいます。2014年から始まったこの取り組み、最近ではずいぶん知られるようになり、路上へのポイ捨ては激減しました。

CSR推進局放送文化推進部
武田直子



映像制作支援・学びアイ



【2019年度の実施校】

奈良県高等学校放送部夏期合同研修部会

(奈良北高等学校、郡山高等学校、奈良高等学校、王寺工業高等学校、高田高等学校、帝塚山高等学校、高円高等学校、生駒高等学校、高取国際高等学校の各放送部、放送委員会)

- 栗村文彦(報道映像部)「撮影の基本と心構え」
- 竹上萌奈(アナウンス部)「アナウンスの基本と発声」
- 武藤良博(放送文化推進部)「番組作りの基本設計」



指導する竹上萌奈アナウンサー

兵庫県立姫路西高等学校 映像制作チーム

武藤良博(放送文化推進部)
「姫路市とタッグを組み、市の公式webで配信する姫路の観光や伝統文化のPR動画を高校生有志が制作する際のテクニカルサポートを実施」

神戸市立神戸渚中学校 放送部

武藤良博(放送文化推進部)
「映像と音声コンテンツの基本的な作り方」
「作品の講評とテクニカルなアドバイス」

兵庫県立大学附属高等学校 放送部

石田善久(放送文化推進部)「ドキュメンタリーの撮影方法と心構え」
武藤良博(放送文化推進部)「番組作りの基本設計とその先の手順」

普通という難しさ ~奈良県高等学校放送部員 真夏のアナウンス修行~

夏休みの貴重な一日を使って、奈良県の高
学校の放送部員が集まってアナウンス勉強会を
行うという。元放送部員という理由で講師をする
ことになった私だが、実は授業や集会をさぼる目
的で所属していた最低な部員だった。暑さとは違
う理由で汗が出る。

原稿読みはみんな上手で、中には県大会で表
彰された子も。そんな彼らに教えるべきことは…。
私は悩んだ末に、「もっと普通に」と言った。これ
は私のアナウンスの師匠 豊田康雄アナウンサー
の金言だ。原稿を読めば読むほど、なぜか私たち
は「アナウンサーっぽさ」を求めてしまう。でも、「ア

ナウンサーっぽさ」ってなんだろう。はきはきた
話し方ときれいな発音はもちろんできるに越した
ことはない。でも、一番大切なのは「伝えること」
で、そのためには、「普段の自分」でいることが大
事。みんなはそれを聴いて「？」という顔をした。
「だよ」と私も笑ってごまかす。私もまだできな
い。アナウンス道は楽なようで、険しいのだ。

編成局アナウンス部
竹上萌奈



出前授業



- 2019年
- 4/25 立命館宇治中学校 (33人)
島本元信(編成部)/鈴木智雄(制作技術センター)
田中 潤(スポーツ部)
「番組の作り方、番組企画をしよう」「スポーツ番組の作り方」
「テレビの技術について、カメラマン体験」
 - 5/16 河内長野市立美加の台小学校 (44人)
村西利恵(アナウンス部)「上手に話せるようになろう」
 - 6/20 大阪府立大正白稜高等学校 (36人)
石田一洋(アナウンス部)「自分の声が好きになる」
 - 7/1 大阪府立八尾支援学校 (36人)
関 純子(アナウンス部)「人との出会いを大切にしよう」
 - 8/2 開明中学校 (40人)
神崎 博(報道センター)「伝える言葉のちから」
 - 9/10 大阪府立伯太高等学校 (58人)
栗園 香(業務部)「プレゼンテーション」
 - 9/27 堺市立家原寺小学校 (35人)
文倉大志(報道センター)「選挙番組の作り方」
 - 10/11 梅花高等学校 (330人)
根本杏香(宣伝部)「自分の夢に近づくために」
 - 10/23 兵庫県立尼崎高等学校 (37人)
奥 元伸(報道センター)「世界のニュースを伝える」
 - 11/15 大阪府立松原高等学校 (40人)
塩川恵造(報道映像部)「メディアリテラシー」



守口市立庭窪小学校

- 11/26 守口市立庭窪小学校 (50人)
重松圭一(東京編成部)「想像力のスイッチを入れよう」
- 12/12 樟蔭高等学校 (200人)
藤本景子(アナウンス部)「女性のキャリアリティ」
- 12/13 五條市立五條東中学校 (36人)
伊藤翔太(報道センター)
「テレビのニュース番組ってどうやって作ってるの?」
- 12/2 兵庫県立上野ヶ原特別支援学校 (11人)
ひかりの森分教室
加藤雅也(視聴者情報部)「テレビ番組をつくるコツ」
- 2020年
- 1/28 大阪市立矢田東小学校 (45人)
前 洋一(編成部)「スポーツ番組を知ろう」
- 2/21 大阪市立生魂小学校 (40人)
田中祥吾(制作部)/田中里美(タイトルエイト)
「番組をデザインする」

社内見学



- 2019年
- 4/2 マリスト国際学校 (24人)
 - 5/22 藤枝市立青島中学校 (10人)
 - 6/5 ECC学園高等学校大阪学習センター (18人)
 - 7/30 西大和学園中学校 (40人)
 - 8/20 西大和学園中学校 (42人)



報道スタジオで豊田康雄アナウンサーと



『よーいドン!』のスタジオを見学

- 9/18 大和郡山市教育委員会学科指導教室「ASU」 (17人)
- 10/1 関西学院大学社会学部難波ゼミ (26人)
- 11/6 同志社大学プロジェクト科目と京都文教大学 (15人)
- 12/17 箕面自由学園高等学校 (19人)
- 2020年
- 1/15 大阪市立今里小学校 (34人)
- 2/5 大阪市立西中島小学校 (19人)
- 3/18 白頭学院建国中学校 (32人) ※新型コロナウイルス感染症拡大のため中止

CSR活動 月次カレンダー

2019	4/2	社内見学スタート ^A マリット国際学校(神戸市)	
	4/8	FNSチャリティワゴンセール 12月にも開催 関西テレビ	
	4/25	出前授業スタート ^B 立命館宇治中学校(京都・宇治市)	
	5/4	こどもの日FNSチャリティ募金 新梅田シティ	
	5/11	「防災@カンテレ 片平さんとみんなで学ぼう!防災の知恵」 ^C カンテレ扇町スクエア	
	5/16	映像制作支援・学びアイスタート ^D 神戸市立神戸渚中学校	
	5/22	CSR講義 龍谷大学	
	7/17	CSRセミナー 「関西テレビにおけるメディアリテラシーとは、その必要性とは」京都大学大学院 佐藤卓己教授 ^E 関西テレビ	
	8/3	出前授業SP「絵本読み聞かせ」 ナレッジキャピタル	
	8/7	阪急阪神 ゆめ・まちチャレンジ隊「アナウンサーになってみよう!」 ^F 関西テレビ	
	8/24	FNSチャリティ現地報告会 樟蔭学園	
	9/7	アートストリーム表彰式 大丸心齋橋店	
	9/29	京都大学iPS細胞研究基金講演会「2030年・再生医療普及のために」 ^G なんでもアリーナ	
	10/16	心でつながるプロジェクト ミニセミナースタート ^H 「テレビ局の強みを生かしたSDGs推進」大阪ボランティア協会 早瀬 昇理事長 関西テレビ	
	10/19	大阪市里親シンポジウム「しせつの子どもたち 里親さんちの子どもたち」 ^I クレオ大阪子育て館	
	11/16	「地方の時代」映像祭2019 表彰式 ^J 関西大学	
	11/16	共に生きる障がい者展 ビッグ・アイ	
	11/24	「カンテレ社員の参観日」社内見学 ^K 関西テレビ	
	12/1	中学生人権作文コンテスト表彰式 ^L なんでもアリーナ	
	12/8	カンテレアナウンサー朗読会 vol.18「おはなしの暖炉」 ^M なんでもアリーナ	
2020	1/17	リンクアップフォーラム・震災25年企画 大阪ボランティア協会	
	1/18	阪急阪神 ゆめ・まちソーシャルラボ「GLASS to HAPPY」 阪急西宮ガーデンズ	
	1/26	大阪国際女子マラソンFNSチャリティ募金 ^N ヤンマースタジアム長居	
	2/2	ワンワールドフェスティバル カンテレ扇町スクエア	
	2/13	出前授業講師座談会 ^O 関西テレビ	

放送を続けるために

新型コロナウイルス対策本部事務局

新型コロナウイルスの蔓延とともに、テレビ局としてその使命である放送をいかに続けていくかが重要になりました。

関西テレビでは1月末、新型コロナウイルスが「指定感染症」に定められたことから、社員の感染リスクを最小限にするために、社内内にアルコール消毒液を増設し、手指の消毒と手洗いの励行を全社員に呼びかけました。



入館時に手を消毒する社員や関係者

2月に入ってから新型コロナウイルス対策本部を立ち上げ、定期的に対策会議を開き、状況に応じて対策マニュアルを何度も改訂し、その対応にあたってきました。

局内では、放送の基幹となるマスターへの立ち入りを規制、報道局は不特定多数の人への取材対応とその特殊性を鑑み、局員のマスク着用を義務付けたほか、他部署の社員が報道局に立ち入る際にも同様の対応を求めました。

また、他部署においても最悪の事態に備え、業務を最低限維持するための人員や勤務体制についての検討を始め、全社を挙げて放送の維持に取り組んできました。

そんな中、大阪府と兵庫県が互いに往来自粛や不要不急の外出の自粛などを求めたことから、社としても対応を一段強め、放送に直結する部署以外の職場は原則在宅勤務とするほか、来客、会合、出張などの原則禁止、全社員の館内でのマスク着用の義務付け、さらには、災害時の安否コールシステムを利用し、毎朝社員が検温してその状況を報告するなどして、最大限の感染防止体制を続けています。

テレビ局がその使命である放送を続け、視聴者に情報を送り続けるため、新型コロナウイルスの感染が収束を迎えるまで、この対応を続けていく予定です。(3月末 記)

おわりに

原稿執筆時現在、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が世界で猛威をふるっています。政府や自治体は不要不急の外出の自粛や在宅勤務を呼びかけ、多くのイベントが中止に追い込まれて、都市住民の多くは自宅に逼塞することを余儀なくされています。また、医療従事者や流通・インフラを支える人々は昼夜を分かたずこの脅威に立ち向かっておられます。

こういった状況下で私たち放送事業者は、確かな情報を伝え、社会がこの事態を克服するための活力を支えるという使命を果たし続けなければなりません。対話のコミュニケーションがかなり制限され、人びとが不安に苛まれている中では、誤った情報がさらに伝わりやすくなります。そういった状況下で比較的信頼度が高いとされている電波メディアは、お伝えする情報の精度やスピードにより一層細心の注意を払い、従業員やスタッフの感染を防止して取材・放送体制の確保充実に注力しなければなりません。社会

の持続可能性が危機に瀕している今こそ、放送事業者は社会の負託に応える必要があります。

当社はCSR活動として、「地域への貢献活動」「子どもたちの未来のために」「人権を守る」を柱に、この1年もさまざまな活動にも取り組んできました。これからもその方向は変わりません。持続可能な未来のために、社会と協働して取り組んで参ります。

新型コロナウイルス感染症の跋扈にあたり、報道機関、メディア企業としての当社の本来の企業活動がCSRの根幹そのものであることを肝に銘じ、社会とともに持続可能な未来を築くために、社員やスタッフの総力を結集して邁進してまいります。

視聴者の方々をはじめ、各位のご理解ご協力をお願い申し上げます。

取締役CSR推進局局長

大場英幸



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



持続可能な開発目標 (SDGs=Sustainable Development Goals)

SDGsとは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されている2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル(普遍的)なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

CSR REPORT 2020 関西テレビ放送 CSR報告書2020

編集・発行：関西テレビ放送株式会社CSR推進局
〒530-8408 大阪市北区扇町2丁目1番7号
☎06-6314-8888(代表)

対象期間：2019年4月1日～2020年3月31日

このレポートはホームページでも開示しています。

www.ktv.jp/ktv/outline/csr.html



会社概要

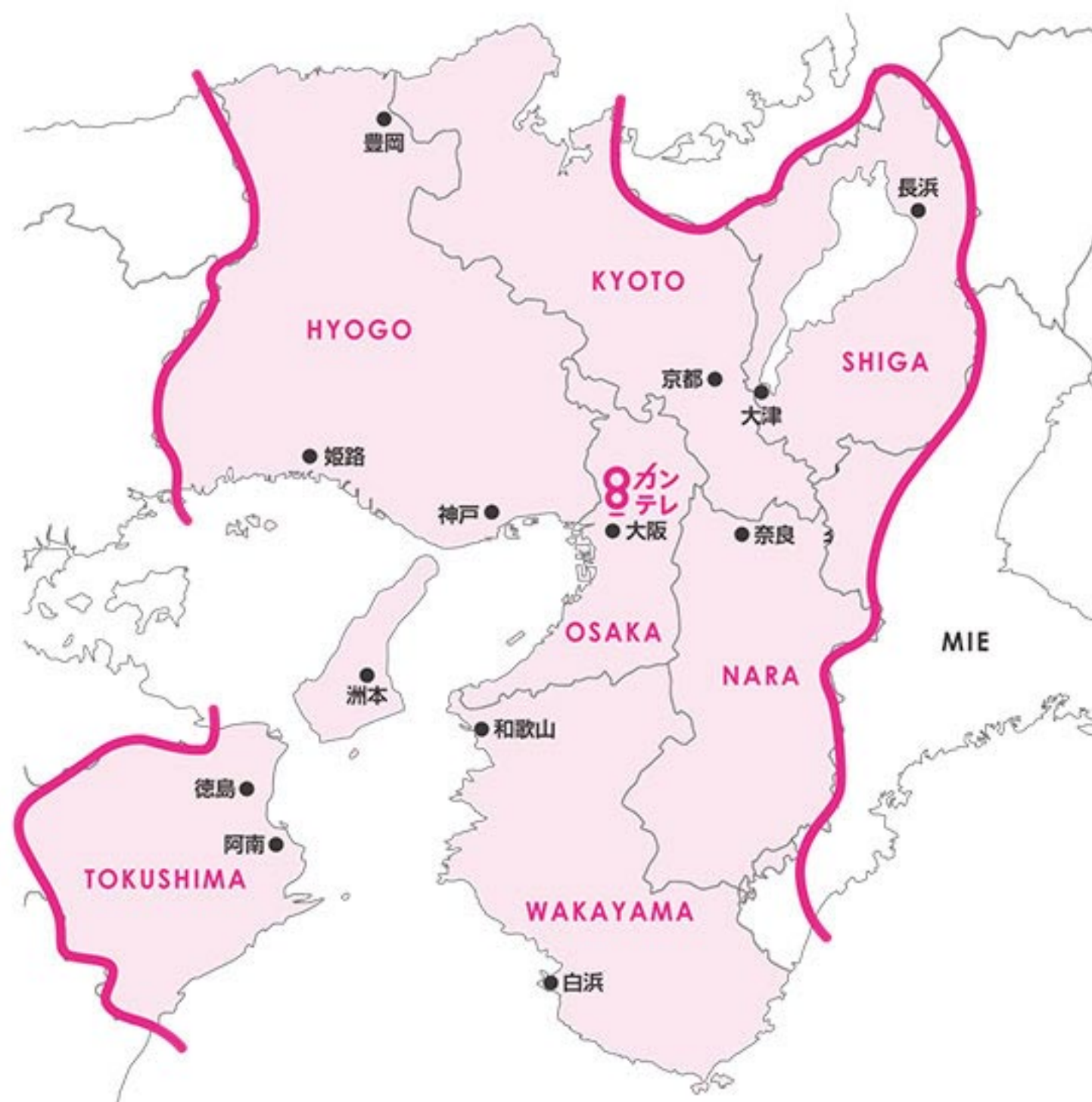
名称 関西テレビ放送株式会社
本社 大阪市北区扇町2丁目1番7号
代表者 代表取締役社長 羽牟正一
設立 昭和33年(1958年)2月1日
開局 昭和33年(1958年)11月22日
資本金 5億円
社員数 577人(2020年3月31日現在)
事業所 支社：東京
東京都中央区銀座5丁目15番8号 時事通信ビル12階
支局：名古屋 / 海外支局：上海
海外特派員：パリ、ロサンゼルス

グループ会社

株式会社関西テレビライフ
株式会社メディアプルポ
株式会社関西テレビハッツ
関西テレビソフトウェア株式会社
株式会社レモンスタジオ
株式会社ウエストワン
株式会社セントラルテレビジョン
株式会社ウエルネスライフ
公益財団法人関西テレビ青少年育成事業団

関西テレビ視聴可能エリア

人口：約2,165万人※ / 世帯数：約1,009万世帯※
送信所：東大阪市(生駒山頂) / サテライト局：72局 / ミニサテライト局：70局
※2019年度版近畿地区テレビエリアインデックスより





8 / カンテレ